

平成二十五年七月発行（年二回発行）
『湧水』 通巻 第三号

湧水



千代田岳精会
自作自詠俳句研修会



里門にたまの阿とあ里山さくら

正岡子規

楽しい研修会に

自作自詠俳句研修会企画担当

細川 をさむ

私は、俳句つくりと漢詩の吟詠を初めて三年になります。先生方及び吟友の方のご指導により少しは上達(?)したと思います。

毎月一回の研修会は、希望者に俳句の推敲、当番制の名句鑑賞と兼題の出題、時には俳人の講義、郊外での吟行会と懇親会を行っています。自分の作った俳句を詠み、その感動した情景などを説明した後、吟友より感想を伺い、そして先生から「ここを直せば更に良くなります」などの指導を受け後、コンダクターの伴奏で俳句の吟詠をする研修会です。自分が作った俳句を吟詠し、皆さんに聴いて頂ける事は心が和み楽しいひと時の集いであると思います。

今後とも先生方や吟友の皆さんのご指導のもとで、楽しい研修会になりますように精進していききたいと思っております。

講師出句

去 来 忌

実 重 万 葉 「埋み火」 同人

ソーダ水消えゆくものに純喫茶

花野にて綺麗な嘘をつかれけり

空洞の幹とも知らず啄木鳥来

浅草を背景にして七五三

去来忌や角帯ばかり並ぶ店

待春やそこはかたなく父母のこと

講師出句

蜺採

池田笑子 「若葉」 同人

蜺採雪舞ふ湖へ鋤簾曳き

アンジェラスの鐘に心の凍て弛ぶ

川舟に鴨汁啜りあたたかし

梨咲くや巡礼みちの標石

花は葉に血縁うすき身なりけり

蛇拓貼る祠古りけり万緑裡

講師出句

雲雀

山田美子 「山火」 同人

山の水手につけ年の繩を鞠ふ

脚の神虫喰ひとなり山笑ふ

桃の花一村靄に隠れけり

札所へと山路えいざん堇咲く

声止めて畑の真中に雲雀落つ

寺領杉秀より藤房滝と垂れ

冬の朝

川口 童人 (榮三)

掘割の流れの霞む冬の朝

竹馬や伝授する人華甲すぎ

水道も調子よくなる水温む

山小屋へまわり道して春の灯

耕運機唸りを上げて夏に入る

空梅雨や憂うことなし甲羅干し

走り梅雨

河合 朝香 (節子)

新しき目覚し時計春隣

庭石に木の影残し夏に入る

能楽堂古りて紅梅よく映る

誰が住むか高き石垣蔦紅葉

一灯は蕎麦やの灯り山の奥

ふみ石を青く濡らして走り梅雨

雲の峰

菊地としひろ

(利廣)

蜘蛛の巣と落葉くるくるダンスかな

雨に濡れ残る木々の葉冬にいる

梅雨寒し雀や鳥静かなり

夏灯祇園ことばに迎えられ

夏に入る詩吟講座の熱気かな

その向こう故郷のあり雲の峰

4

慕草

久保合風

(合介)

嫁が君姿隠して幾年ぞ

猫の恋月皓々と小縁かな

春の灯や香り残して嫁に往き

泥凪をまだらに染めて春の雪

初夏の園徳川の代の慕草

しのびぐさ

鳥鳴くや竹落葉舞ふ六義園

5

友

小林智子 (智子)

去年今年忘れ得ぬこと悲しくて

真白なる餅を沈めし水澄めり

携帯に亡友ともの名あり寒夜かな

暁日や白のまばゆき川は春

前垂れの水子地藏と藪椿

藤棚の日を隠してや風清し

6

初春

鈴木陵人 (重成)

初春を纏いておりぬ晴着かな

名優の六方哀し二月逝く

稚児たちの声もはずみて園に春

名曲と古書に惹かれて春ともし

鳥翔ける空一直線を夏に入る

鳥語飛び交う朝の長閑さや

7

初詣

徳本順治 (順治)

あれやこれ願ひ重なる初詣

雪解けの道踏みしめて帰路急ぐ

梅の香や庭一面に陽光さし

水ぬるむ川面に跳ねる魚影かな

春灯下託児所を出る母娘

凱風の櫂並木や夏に入る

春一番

橋本千舟 (隆一)

奥宮の崖に幣立ちお正月

日当たりの堂縁に跳ね冬鶉

春一番沼波尖り尖り寄す

溪流の羽虫の光り水温む

春昼にカンツォーネ聞く床屋かな

鳥の翅拾う山路や夏に入る

桃の郷

八田 玄 猷 (豊)

卒業式児の振るタクトフォーエバー

花摘みて帰る子の声窓の下

窓越しに若葉萌え立つ審査の日

二輪だけ咲ける蠟梅艶やかに

乙女立ち紅にほふ桃の郷

桜追い立てる海辺は震災地

武蔵野

林 精 吾 (治 一)

幼犬の立居にぎやか夏に入る

武蔵野の芽吹きの樹々に寄る小鳥

苔集め鳩木の枝に巢作りす

雨止んで家路急げば春ともし

新緑の道をたどれば香にむせぶ

昨夜の雨若葉ののびて風起きる

命

藤原 壽

(寿子)

初茜生かされてゐる命なり

梅探る樹々の命を耳で聴く

待つといふ時ありてこそ雪間草

花菜漬け母が語つた恋の事

さえづりやいのちの讃歌に乾杯す

12

始 動

本 多 桜 子

(敦 子)

初春によぎる一茶の名句あり

寒もどり炬燵の温もり懐かしく

あなたへの想いを告げに春動く

千年の都大路や春灯り

吾子と見る夏燕飛ぶ柿田川

鮮やかに薔薇咲き揃う路線かな

13

惜春

細川をさむ

(修)

四苦忘れ詩を吟じをり去年今年

凍つる夜の句を考へつ寝まりけり

寺参り彼岸に届く読経かな

子の手術終へし安堵や春時雨

難病の友を訪ねて春惜しむ

老木に新たな命梅は実に

史を識らず

前田道人

(道紀)

春燈厨に影の動くあり

春憂ふ舟とどめしは杜甫なりや

さつき塚狭庭に漲る気力あり

通し鴨白堤にゐて史を識らず

清明や朋友ともに献盃吟一句

告げしまま梅雨忘れしや大甗

梅一輪

三 須 いくよ

(以久代)

切りくれし梅の一輪凜とあり

時期未だいのちを満たすばらの刺

桜しべふり積む道のやはらかし

春うごく思案のはてにききし声

水欲りて瑠璃蝶ふるう石の窪

マンモスの採血が生む夏の夢

雪嶺

耳塚のぼる

(昇)

初春や鈴振る巫女の細き眉

一枝の梅を活けたる至福かな

寝つかれずアベマリヤ聴く春疾風

雪嶺の遠くにありて桃の郷

病む友の小さくなりぬ花の雨

本堂を覆ふ樺や夏来る

目に青葉

湯山 得自楼

(徳次郎)

目に青葉努力の絆師弟愛

オルゴール鳴らし師走の集塵車

日脚伸ぶせんこ儂湖暮雪の碑いしづみに

ヒヤシンス水中根張り香を放つ

満天星の白鈴垂れ咲き初むる

薔薇園の今を盛りに研競う

春
灯

池田蓮花

(康子)

春灯や振り袖の袂風が吹く

通ひ路白梅ふふむ日和かな

水温む朝日さし込み床を出る

春灯や揺らぐ娘の耳飾り

シャボン玉ふわりふわりと空に消ゆ

夏に入る母衣のおおひのベビーカー

信濃路

稲垣 ひさ (ひさ)

信濃路やうぐひすのこゑこだまして

苺狩食べ放題に孫の頬

カーネーション戴く幸に感謝して

靖国の参道桜花に埋まる

カーネーション園児手に手に走り行く

土手堤子等の喜声や夏に入る

花に憶う

磯田 烏城 (貞二)

白木蓮剥ち激し不動明王

白木蓮無垢無残なり夜半の雨

艶競う花爛漫の朱夏の女

藁困い解きて牡丹芽逞ましき

君子蘭主ある如妻想う

花冷や推敲未完の日記帳

選六句

岩崎精慶 (泰俊)

寒がつてばかりもをれず歩きけり (朝日新聞)

障子貼る妻の邪魔せず外に出る (NHK)

古タオル蛇口に巻きて寒の入り (NHK)

春の雪晴天残し消えにけり (朝日新聞)

春炬燵妻は眠気に逆らはず (NHK)

漢字来し国より来る黄砂かな (朝日新聞)

あとがき

俳句は難しい・俳句は勉強が必要・俳句は面白い 川口童人

俳句研修会に入ってから三年になる。それまでは俳句を一句も作ったことがなく俳句の本を読んだ事もなかった。五・七・五の一七文字を使って文(句)を作るのだから何とか成るだろうの気持ちであった。

ところが、俳句なるものを作るには、季語から始まり、言葉の順序と並べ方、無駄な言葉を捨て、大胆に言葉を省略する事が、感動する俳句が出来る、と言われると成る程と思うがなかなか難しい。それを克服するには、言葉の意味や使い方等について勉強し、作者と言われる人の句は勿論、俳句を勉強している人たちの作品を熟読することが大切ではなからうか。自作自詠俳句研修会とはそのとおりで、お陰様で作句の難しさを感じ、一七文字で少しづつ花鳥風月を表現出来る様になって来た事が嬉しく、やる気が醸成されてくる。研修会では自作自詠が必須で、指導者先生の作句についての講評と推敲、会員の自由感想が終わった後、作者の自詠がありホットひと息つける。会員の皆さんは熱心で朗らかで、ひとり一人の個性が出て面白い。此れも研修会で顔を合わせて勉強するからであろうか。

自作自詠俳句研修会

(一) 例 会 Ⅱ 毎月第二火曜日午後二時から二時間

基礎研修・自作自詠・句評

部外講師の指導など

(二) 行 事 Ⅱ 吟行会・納会・特別研修・その他

(三) 句誌の発行 Ⅱ 句誌の発行は年二回 原則一月と七月

俳句を作って楽しみましょう!

俳句自作自詠研修会へのご入会をお待ち致します

千代田岳精会

自作自詠俳句研修会役員

参		与		運 営 委 員	
鈴木陵人	磯田烏城	岩崎精慶	林 精吾	耳塚のぼる	
菊地としひろ	徳本順治	池田蓮花	八田玄猷	小林智子	藤原壽
顧問	顧問	リーダー	運営担当	運営担当	編集担当
前田道人	湯山得自楼	橋本千舟	本多桜子	鵜飼てるお	川口童人
					企画担当
					細川をさむ